

2020年7月12日  
聖霊降臨節第7主日

家庭礼拝のための  
聖書・牧会祈祷・メッセージ



## 【 聖 書 】

ローマの信徒への手紙 15章30節～33節 (新約聖書 296頁)

## 【牧会祈祷】

命の源である神様

この数ヶ月間で私たちは、礼拝を守れることがどんなに大きな恵みであるかを知りました。神様は私たちを休ませ、慰め、私たちに御言葉の糧を与えようとしてくださっています。これまで抱えてきた重荷をここで降ろさせてください。新しい一週間を神様と隣人と共に歩めるように、私たちを新たにしてください。

神様、私たちは祈りによってあなたを近くに感じます。しかし、祈りよりも多くの仕事をなすことに価値を見いだします。祈りよりも自分の力を頼りに前進することを選びます。それでは行き詰まると、すでに知っているにもかかわらず。どうか祈りから離れやすい私たちをお赦しください。私たちが自分の弱さに気づき、言葉にならない祈りさえ聞いてくださる方に、全てを委ねることができますように。

新型コロナウイルスの感染者が増加しつつあります。人々の心は呻いていますし、医療者たちは激務の中で疲弊しています。神様どうかこの地に生きる人々を助けてください。恐れや絶望に自らを明け渡すことなく、適切な予防と判断ができますように。

軽井沢幼稚園をはじめとする、学校や施設を導いてください。世界には新型コロナウイルスによって、学校に行けない子どもが大勢います。労働力にされ、学校に戻れないという問題も起こっています。学びだけでなく、子どもたちの全ての権利が保障される世界となりますように、大人たちを導き、小さい人たちをお守りください。療養をしている友たちを励まし、家庭礼拝を守る友たちを祝福してください。教会から離れている人たちの胸があなたの愛で満ちますように。

このお祈りを主イエス・キリストのお名前を通して御前におさげいたします。アーメン。

## 【メッセージ】

パウロは、ローマの教会の人々に、自分のために祈ってほしいとお願いしました。そして、この願いはパウロ個人のものではなく、キリストの願いでもある、と言います。また、パウロは「霊が与えてくださる愛によって願う」とも言うのです。クリスチャンは、信仰

の友に「助けて」「祈って」とお願いすることがあります。けれども、本当に祈ってほしいこと、自分の罪や愚かさに直結する祈りの課題を打ち明けるのは難しいことです。祈ってもらうためには、自分の弱さを晒さなければならないからです。聖霊の力はその葛藤か

ら私たちを助けようとしませう。聖霊はパウロに、もっと強くなるために自分の弱さを打ち明けさせたわけではありません。パウロが「霊が与えてくださる愛によって」と書くのは、聖霊によって「あなたは他者の祈りによって支えてもらわなければならない存在だ」と促されたからでしょう。

パウロの願いは三つです。一つ目がパウロを憎むユダヤ人や異邦人伝道を認めないユダヤ人キリスト者たちの力から守られるように、ということ。二つ目がマケドニア州やアカイア州で集めた献金がエルサレム教会に受け入れられるように、ということ。三つ目は先のふたつが成功して、ローマで休めるように、ということです。一つ目と二つ目の願いから分かるように、彼が最も恐れているのは人からの暴力や拒絶です。それを突き詰めるとパウロは人の罪を恐れているのだと思うのです。私たちも人を恐れます。「私」という存在ををないがしろにする人や、攻撃してくる人は怖いものです。しかし、その人全てがおそろしいではありません。私たちが恐れ、怯えているのは、その人の罪の現れ、罪の力です。

パウロは自分がエルサレムに行くことによって、混乱を生み、人々の罪が加速していくことを知っています。暴力や拒絶に対抗する手段は、相手よりももっと大きな力を持つことのはずです。けれども、彼はキリスト者として力で抵抗してはいけなないと考えています。力に対して力でねじ伏せるのであれば、彼が恐れていた罪の中に、自らもまた捕らわれてしまうということです。パウロが持てる手段は、キリストに頼ることしかありません。

私たちが頼るのは、この世に勝利したキリストの愛です。拒絶に屈しない愛、死にさえ勝たれた愛。それ以上に、信頼できるものはないはずです。しかしそれ

でも、私たちの怯えや震えがなくなるわけではありません。だから、パウロは祈ってほしいと切に願うのです。怖れの逃げ道は祈りしかありません。

原文のギリシャ語を読みますと、祈りにおいて私と共に戦ってほしいとパウロは言っています。パウロは整った祈りの言葉を望んでいるわけではありません。この恐れを共に感じて、私と一緒に神様に向かってほしいと願うのです。

イエス様も祈りを共にしてほしいと願われました。ゲツセマネの園の場面です。マタイ、マルコ福音書において、イエス様は直接「祈ってほしい」と言うのではなく、「私が向こうへ行っている間に、ここに座っていなさい」とおっしゃいます。イエス様が求めておられたのは、立派な祈りの言葉ではなく、この苦しむ自分を確かに見えてほしいということでした。そして、園とご自分を覆う暗闇を見つめるのではなく、共に神様の方を向いてほしいということだったのです。それがイエス様の求めた祈りです。

祈りは、その熱心さによって未来を願い通りにすることではありません。事態が良い方へ急展開すれば嬉しいことですが、変化のあるなしが祈りの本質ではありません。祈りによって知るのは、変えられない苦しみさえ、神様が共にしてくださっているということです。神様は祈った結果におられるのではない。祈りの苦悩さえ神様は共にしてくださるのです。

パウロの祈り「平和の源である神があなたがた一同と共にいるように」とは、教会やあなたの抱える問題が素早く解決し、平安になりますように、という意味ではありません。あなたの悲しみや苦しみの道程を神様も共にしてくださっている。それが祈りを通して明らかにされることをパウロは願います。いえ、神様が私たちのためにそう願ってくださっているのです。